復讐の咎人

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐の咎人

【Nコード】

N06010

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

あの日、全てを奪われた少年は、復讐だけを生き甲斐として生きてきた。そう、天人への復讐だけを糧に・・・

(前書き)

前書き

この話は、作者の脳内で色々出てきた事を、原作に多分矛盾しないように試行錯誤してみた物です。

今回は今までの短編より、気合を入れて書いています。
ではごっご。

妖怪の山の麓で、青年は己の拳をぐつと握り締めた。血が出てもおかしくない程の力で。

青年はこの日、この妖怪の山の頂の、その更に上の玄雲海よりも上にある、天界を目指す為に、ここまで来たのだ。

青年は拳を握り締めたまま、妖怪の山を歩き、上っていった。

しかし、ここは人間禁制の場所、山の妖怪達が、人間の登山を黙って見ている訳がなかった。

だが、誰も青年の登山を邪魔する者はいなかった。いや、正確に言えば止めようとしていたのかもしれない。

そう、誰も青年を止めようとしなかったのだ。この山の妖怪達は、無謀な戦いに身を投じる程馬鹿ではない。

それだけその青年が、妖怪達にとって危険だと思われたのだ。ただ歩いているだけで、妖怪達にとっては畏怖の念を感じ取られたのだ。

そんな最中、青年は玄雲海に行けそうな所にまで上り詰めると、青年の前にたつた一匹だけ、この山の妖怪が立ちふさがった。

その妖怪とは、この山に古くから住む鴉天狗の、射命丸 文だった。

「・・・あなたは人間ですね？ここは人間が立ち入ってはならない場所です。早々に立ち去ってください。」

鷹よりも鋭い眼光と丁寧な口調は、文自身の怒りを強調するには十分な物であった。

青年はそれにひるむ事もおびえる事もなく、自身の歩みを進めた。

文の声も何も、その心に届いていないようであった。

立ちふさがったままの文は、青年と違つて一步も動く事もなく、ただ青年を待ち構えた。

「いいでしょう・・・回答がないのであれば、実力で排除させていただきます!!」

自身の扇子を構え、それに風を纏わせていった。

纏った風はやがて荒れ狂う突風となっていき、その大きさは増してゆくばかり。

そして文は、荒れ狂う風を青年に向かって解き放った。

「受けなさい!!風符!!天狗道の開風!!」

文字通り、竜巻が青年に向かって、ぐおおおっという音を立てて飛んでいった。

青年は避ける事もせず、その竜巻に呑み込まれていった。

しかし、竜巻が青年に通過しきった時、文の視界には信じられない物に移っていた。

青年の体どころか・・・青年の服一つにすら、傷がついていなかったのである。

文は目の前で起きている事が信じられず、傍観としてしていると、青年が文のすぐ傍にまで来ていた。

「・・・は!!」

寸前で正気を取り戻した文は、どうにか青年から距離を取った。

その直後に、全身が凍りつきそんな感覚が、文を襲った。

目の前にいる存在が、自分の理になっていない存在である事が、自然と自身の中にある生存本能を呼び覚ましたのだ。そう、本能が戦いを拒否したのである。

文は頭のよい妖怪である。自分の中で起きている不自然な事に、すぐ答えを導き出してしまふ。

そつだ、戦つてもかなわぬ事がわかつた以上、文はもうその青年に手を出すべきではなかつたのだ。しかし、不幸にも文はそれ以上に・・・自分への誓いを守る心の方が勝つてしまつたのである。

青年が玄雲海に続く道へと足を踏み入れようとしたその瞬間、文が青年へと飛び掛つていった。

「ああああああ！！！！」

強がりと意地の混じつた声が、妖怪の山へと響いていった。

その声の後に続いて、何かを凄まじい力で殴つた音がした。そう、あのドガツという鈍すぎる音だつた。

その音の後で、妖怪の山にいる鳥達がばたばたと一斉に飛び去つていった

ここは玄雲海。基本的には客人など訪れはしない。あの巫女や魔法使いが訪れた後は、割かし静かな物である。

静かとは言つても、四六時中雷鳴の音がしている場所で、静かななどと言つ言葉はあまりに似合つてはいなかつた。

そんな中を、あの青年はただ悠然と歩いていた。拳には、明らかに何かを殴つた後の血がついていた。

もちろん、ここも人間如きが立ち入つてはならない場所である。いや、本当ならば人間が立ち入る訳がないのである。ここはあまりにも危険すぎるのだから。

青年が歩みを続けていると、雷雨の中から雷鳴と共に、あの永江衣玖が姿を現してきた。

そして衣玖もまた、文と同じように、青年の前に立ちふさがるように地に降り立った。

衣玖はただ、青年を見据えた。じつと青年を見据えた。言葉も何も示さないまま、衣玖はただじつと青年を見据えていた。そう、衣玖は文よりももっと早く、青年の圧倒的力を感じ取ったのである。恐らくは持ち前の能力のお陰であろう。

だからこそ、衣玖は青年をどうすればよいのか、答えを出せないままであったのだ。

衣玖は、勝負事は自身に勝利の可能性がなければ、下手にしようとはしない者であった。

だが、今回は明らかに負け戦になるとわかっている。衣玖本人は一番それを理解していた。

それでも、衣玖は引き下がる訳にはいかなかった。自身の主君の為に・・・引き下がる事など出来はしなかった。

「魚符・・・龍魚ドリル!!」

青年に対しての第一声は、スペルカードを唱える為の一言であった。己に纏わせた衣と雷をその手に集束し、敵を貫くスペルカード。

ドドドドドっという音が響いた瞬間、青年に、その槍は確かに届いた・・・しかし、それはやはり意味を成さなかった。

槍は青年の胸元でぐにやりと折れ、電撃はどこへなりと霧散していった。

自身の攻撃が、まったく通用しなかった衣玖は、自身の思考と動きをその場で止めてしまった。

そんな衣玖を無視し、青年は天界へと進んでいった。自身の本当の目的を果たす為に。

少年がその場を去った後で、衣玖はその場に膝を折り、後悔し続けた。

侵入者を止められなかった事と・・・何も出来なかった自分の無力

さを、ただ嘆き続けた。

そして衣玖は覚ってしまった。自分では恐らく、主君の力には到底なれないと。

衣玖は後悔よりも、ただ祈った。自らの主君の安否を・・・ただ祈り続けた。

天界、天人以外は足を踏み入れてはならない聖域。

その聖域に、制年はとうとう足を踏み入れた。悠然と・・・ゆつくりと・・・

青年はここに来るまで、一言も喋る事はなかった。表情もまったく変える事はなかった。まるで顔全体が凍りついているかのように冷たかった。

しかし、青年はここに来て初めて、声を発した。表情も、冷たい顔ではなく、怒りを帯びた表情であった。

「どこだ・・・出て来い！！天人！！」

天界中に響いたと言っても過言ではない程の怒号。

それがさすがに聞こえたのか、青年の前に、天人、比那名居 天子が天から悠然とその姿を見せた。

「その声を荒げなくても、私はここにいますよ？」

地に立ち、青年に礼儀を払った。

「・・・お前が・・・天人か？」

青年の荒げた声と気迫は、天子を明らかに威圧していた。

天子はその様子に、おびえる様子も見せなかった。あくまで冷静かつ丁寧であった。

「そうでしたよ。私の名前は、比那名居 天子と申します。以後お見知りおきを。」

天子の丁寧な挨拶に、青年は丁寧に返す訳がなく、むしろ荒々しく返した。

「そうか・・・お前が・・・俺達の住んでいる場所に・・・地震を起こしたんだな？」

「・・・それはどうかは存じませんが、今の私はそういった事を統括している存在ですので、もしかすればそうだったかもしれませんね。どうしました？それが何か不服ですか？大地の流れを整える為に、地震は必要な事です。その程度の事がご理解していただきたいと・・・」

「もういい!!」

天子の長々しい説明を遮るように、青年が吼えた。

「それだけわかれば十分だ・・・比那名居天子、今から俺が・・・お前を殺す!!」

「そうですか・・・ならば、お相手いたしましょうか。」

ブオンといった音とともに、その手に緋想の剣を構え、光らせた。

「人と天人の力の差を・・・その身を持って知りなさい!!」

その一声によつて、二人の戦いの火蓋は切つて落とされた。天子は先手として、青年に無数の要石を放った。

ブウンという音とともに飛んでいったその石を、青年は全て手をぶんぶん振り回してはじき散らした。

もちろん、この程度で天子の攻撃は終わらない。

天子は次の手として、緋想の剣を地面に刺し、ダダダッと地面を連なつていく石の刃を少年に向かって放った。さながら激流のように。

その刃は、青年の体に触れていったがガキンと弾かれていき、結局は傷一つつける事なく、ただ地面から飛び出していっただけになった。

「くっ!」

焦りを感じた天子は、要石を自身の正面に構え、そこから無数の赤いビームをチュチュチュンと放った。

青年は避ける事もせず、そのビームを真正面から受けた。

ビームは少年にかすめる事もなく、どこへなりと散つていった。地面に着弾したか、あるいは空を切ったか・・・

これほど手を尽くしても、ことごとく攻撃が効かない天子は、ふとある答えを導き出した。

「もしやこれは・・・あなたの能力?」

「・・・さあな。どちらにしても、俺は・・・お前を殺すだけだ!」

さっきまで攻撃をいなしていた青年は、とうとう天子に対して攻撃

を始めた。

青年の攻撃、それは、地面の土をえぐって……思いつきり投げる……ただそれだけだった。

だが、それだけの攻撃でも、天子には凄まじい攻撃に見えたのである。

土を投げたとは到底思えない轟音、目で追うのはまず無理な速さ。

天子は自分を丸ごと覆うほどの要石を使い、どうにか防ぐ態勢を取った。だがそんな事は無意味に等しかった。

大地を支える要石は、大地の一部である土の前に、いともたやすく壊されてしまったのだ。

要石が碎けるゴシヤアという音の後で、天子の体中に土の散弾がかすめていった。

かすめた土は、地面にドドドドと着弾し、まるで銃が当たったような音を奏でて、全て地面に返っていった。

体にこそ着弾しなかったが、天子は膝を折り、地面に座り込んでしまった。

駄目だ……何をしても……私では勝てない……

意気消沈となって、天子の心は折れる寸前になっていた。

しかし……天人としての最後のプライドが、それを許す事はなかった。

折れかけた心を繋ぎとめ、天子は……自身が使える最高の技を……構えた。

「……食らいなさい！！全人類の……緋想天！！」

周囲にある天候を集め……緋想の剣を媒介として……己の全てを解き放つ、今の天子が使える最強の技。

紅く巨大な光線は、チュドオオオオという音を立てて、青年を呑み込み、広がっていった。

天界の一部が、焦土と成る程の絶対的一撃。無事で済む訳がない。

やがて光線は全て解き放たれ、青年のいる場所は、土煙で何も見えなくなつた。

天子は疲れと霊力の不足から、その場にごくんと膝を折り、地面に手を置いた。

相手は人間であつた。自分は天人であつた。しかし、その人間は、博霊の巫女や、あの魔法使い以上に・・・危険な存在であつた。

人間相手に全力を賭した事・・・その事に、天子は何の恥じらいもなかつた。いや、そうしなければ勝てなかつた・・・事実天子は、一度敗北を覚悟していたのだから。

だが、自身の全力の技の前に・・・敵は破れた・・・天子はそう思つていた。

なぜ、それを確認してもいないのに、天子はその答えを出してしまつたのだろうか？

そうしなければ、天子は己の心を・・・支えきれなかつたからだ。目の前の存在を・・・どうしても消し去りたかつた・・・さっきの天子の心は、この事一色だつたのだ。

だが、現実はどうあがいても・・・決して変わる事はない。どれほど残酷な事でも・・・決して変わる事はない。

土煙の中から、青年は天子に向かつてずんずんと歩いてきた。上半身の服が焦げていたが・・・体にはろくに傷がなかつた・・・それを見た天子は・・・もう訳がわからなくなつていた。

恐れ、怯え、恐怖、畏敬・・・天子の感情は、どれに例える事もできなかつた。あえて例えるのなら・・・無しかないだろう。

自身の心が、ガシヤアンと音を立てて崩れていく・・・今の天子はもう、さっきまでの威厳のある姿とは、かけ離れた有様になつていた。

足が震え、立つて逃げる事も出来ず、ザツザツと両手両足で地面をこすつて・・・逃げた・・・青年から目を背ける事をせず、否、背ける事も出来ず・・・ただただ逃げた。

青年はいさん構わず天子に近づいていった。走る事もせず、ゆっくり

りと歩いて追いかけた。

天子は走って逃げている訳ではない。だから、少年は走る必要もなかった。

そして今、青年はとうとう天子を・・・その手で殴れる程の距離にまで迫っていた。

青年は無言のまま、己の拳を握り締めた・・・そう、妖怪の山の麓でそうしたように、力強く・・・握り締めた拳を、天子に向かって構えた

後は、それを・・・ただ天子に振り下ろす・・・恐らくそれだけで、自分の目的は達する事が出来る・・・いくら天人の体が強靱でも・・・こうして逃げている以上・・・耐えられないと自分で言っているような物なのだから。

青年が目的を果たそうとしたその時、青年を見ていた天子の目からぼろぼろと・・・涙が流れていた。

「・・・嫌だ・・・嫌だよ・・・死にたくないよ・・・なんで私なの・・・私はただ・・・」

プライドも何もない、ありのままの感情。助かりたい一心から出た。悲痛な叫び。

「黙れ・・・お前がやった事を・・・知らないとは言わせない・・・」

「だから・・・何の事なのよ・・・私が下界に地震を起こしたのは・・・博霊の神社だけなのよ・・・」

その一言が告げられた時、青年はそれまで自分の心の中にはなかった・・・迷いが生まれた。

そう、今天子が言った事が事実であるのなら、青年の目的は・・・

それこそ何の意味も成さなかったのだ。
そもそも、なぜ青年が今こうして、天人に己の鉄槌を振るおうとしたのか・・・語らなければ、わかりはしないだろう。

なんて事はない。よくある話である。

少年は昔、母や父、兄や妹の愛を受けて、幸せに暮らしていた。家族だけじゃない、友人や気になっている人の愛などが、少年の心をより明るく、一層幸せにしていた。

だからこそであるう。人は得た時以上に・・・失った時の傷の方が・・・圧倒的に深くなる物である。

ある日、少年はみんなが住んでいる所から少し離れた所の川に、水を汲みに行き、帰る途中の道則で・・・それは起きた。

地面が揺れ、大地が形を変えていく・・・少年は水を汲んでいた器を落とし、こぼれた水が地面に広がっていく。

しばらくグラグラと揺れが続き、ようやく止んだ時・・・少年は、水を汲んでいた器をほったらかし、一目散に・・・みんなのいる所へと駆けて行った。

そう思いたくはない・・・だが、その可能性は否定できない・・・その時の少年の心は、ぐるぐると複雑に絡み合っていた。

少しして、少年の前にその答えは出された・・・恐らく少年が一瞬だけ思っていた・・・答えであった。

少年は泣き崩れた。全てを奪われた少年は、どうしようもない憤りをぶつける事も出来ず、ただ泣き崩れた。

泣き崩れている時、少年は・・・なぜこうなったのか・・・当てのない答えを導きだそうとした。

皮肉にも、その答えはどこかの文献で聞いた事のある物から・・・

導き出してしまった。

そう・・・天候を操っている大元の存在・・・天人達である。
その答えに行き着いた時・・・少年の涙は、真っ赤な血に変わって
いた・・・そう比喩出切る程に、少年の心は復讐心に囚われていた
のだ。

天人に復讐する・・・ただただその一心で、明るく活発な少年は・・・
・復讐の鬼へと成長していった・・・

そして、舞台は今に戻る。

復讐心・・・ただそれだけしかなかった青年の心に生じた・・・少
しの迷い。

そうだ、少し考えれば、この者がやったとは断定出来ない。
ただその者が言った事から、憶測に判断したに過ぎなかった。

ならば、もし本当にこの天人が青年の全てを奪った物でないのでは
れば・・・この復讐劇は、何の意味もないただの八つ当たり等に等し
かった。

いや・・・今の少年は・・・子供のように怯え、涙を流す天子を見
て・・・本当の復讐劇すらおも・・・無意味だと言う事を覚らされ
た。

当然の事である。たとえ元凶となった者を・・・その手で殺しても・
・・・何も返ってはこない・・・何も残りほしくない・・・ただ虚しさ
しか残らない・・・

その答えにいきついた時、青年は・・・今自分がしようとした事を
悔いた・・・地面にドサッと跪き、ただ悔いた。

「俺は・・・何をしようとしているんだ・・・」

それまでの自分を、丸ごと否定した一言を自ら発した。今まで、ずっと心の支えにしていた復讐心は今、根底から崩れ去っていった。

その後に残ったのは……今こうしている自分と……初めて会った時とは、見る影もない……子供のような天人の姿であった。

否、恐らくこの天人は……まだ子供なのだろう……青年はそう察した。

なぜそう察する事が出来たのか。背丈だけではない……天人からひしひしと伝わってくる何かが……かつての自分の……少年であった頃の自分と、まったく同じであったからだ。

それがわかった時、青年が今一番に成すべき事が……自然と導き出された。

なんて事はない。泣いている子供に対して、大人がやる一番の行動である。

めそめそと泣き続ける天子に、青年はそれまでにまったく見せなかった、心からの笑顔になって、天子の頭をなでなでと撫でた。撫でながら、青年は一言ぽつりとこう言った。

「ごめんな。」

そう、今青年が言うべき一番の言葉であった。

その言葉を聞いて、さっきまでずっと泣いていた天子は、いや、まだ少しだけ泣いている天子は、なきじゃくりながらも、青年の謝罪の一言に、自分の言葉を返した。

「……私の事、許してくれるの？」

謝られた方が、なぜか申し訳なさそうな状態になる、奇妙な光景になった。

青年はそれを正そうと考えたが、子供にあれこれ言っても仕方ない
と思った青年は、天子をあやそうところ言った。

「ああ。だから、もう泣き止んでくれよ。」

青年の、精一杯の懇願に、天子は応えた。

目にあつた涙を拭い、青年の目を真つ直ぐに見た。その目にもう涙
はなかった。

「うん……」

天子は子供らしい、無邪気で元気な笑顔を青年に向けた。

その後、一度下界に下りた青年は、また天界に訪れた。
今度はもう、復讐の為の渡来ではない。

「……やれやれ、もう始めてるみたいだな。」

誰もいない所で、青年が一人でそうつぶやいた。
遠くから、青年を呼ぶ声がした。天子の声である。

「遅いよお兄さん、もうみんなで鬼ごっこ始めてるよ。」

大きく手を振りながら、青年にそう呼びかけた。

天子の近くには、その遊びの参加者らしき子供達が何人もいた。皆
天子と同じように、青年に大きく手を振って呼びかけていた。

「遅くなった罰として、お兄さんが鬼をやっつけてね。」

「おい、俺は一応時間通りに……」

と青年が問いただしても、子供達の耳には念仏である。

わーっと四方に散らばっていく子供達。青年はその内の一人に目標を定めて、駆けて行った。

「それじゃ、すぐにでも捕まえてやるからな!!」

今青年は、子供達の遊びの中で、新たに追いかけていく物を見つけた。

今を笑顔で生きる。ただそれだけであった。

復讐の咎人は今、明日を生きる一人の人間として、ただ前を歩いていくのであった。

復讐の咎人
F I N

(後書き)

後書き

うゝむ・・・何がしたかったんだろっ、わしは・・・(?!?)

心を入れ替えて、結構真面目に小説を書いてみたら・・・話に脈絡がないと言いますか・・・やりたい放題といいますか・・・(?!?)

チート主人公を一度書いてみたかったのが、この話を書いた一番の理由ですね。

(^|^)

さすがは電波に身を任せ同化しただけはありますよ。ナギッ!! ナギッ!! ナギッ!! ナギッ!! 無視してくださいな(>|<)/

これでも作者はそれなりに頑張っていましたよ(><)/。具体的に言えば、打ったまま寝てしまって・・・翌日の朝に書いているとか(?!?)

とりあえず、多分疑問に思う事を書き出しておきますね(^|^)

1、主人公の名前は？

A・・・気になるのなら、感想でどうぞ。してくれたら返すつもりです。ぶっちゃけなしでもいいんですよわしは。

2、主人公に能力とかあるの？

A ありましえん。主人公はあくまでただの人・間です。鍛錬はつ
んできましたけど。

3、じゃあ、なんでこんなにつおいの？

A 人は昔、鬼と正面から渡り合えたとかいう話をつるペ・・・萃
香がしていた気がするので、それを作者が脳内で変換したのです。
具体的に言えば、復讐心は人を変える・・・です。

4、ガチでやったら、どれぐらいつおいの？

A、今は復讐心に囚われていないので、力の強さは所詮でしょう。
しかし、心の強さはもっと強くなっています。ですので、本当に力
を振るった時の強さは・・・多分霊夢ぐらいですかね？

5、落ちの展開がようわからん

A ・・・まあ察してください。主人公はお兄さんキャラ・・・て
事で。

6、戦闘の効果音が適当じゃね？

A すみません。まだ勝手がよくわからないので。

7、あややとか衣玖さんどうしたの？

A あややの方は見舞いに行ったそうです。さすがにダメージ大きかったんでしょうね。衣玖さんに関して天子が口ぞえしました。思ったより衣玖さん怒ってなかったそうです。むしろこの展開を予想していた？

8、台詞少な（ry

A 小説って、こんな物じゃないでしょうか？今までのわしの奴は、むしろ台詞が多すぎましたので。

これぐらいですかね。他にも気になった事があれば、どしどし言っちゃってくださいな（^ー^）

スペシャルサンクス

青年

比那名居 天子 様

射命丸 文 様

永江 衣玖 様

最後に出てきた子供達

わしに小説の何たるかを教えてくれた師匠 荒井スミス 様

コメントで、戦闘に効果音をいれた方がいいと言ってくれた恩人
ルシファー 様

では、このような粗末な駄文をお読みいただき、真にありがとうございます
ございました

(#^|^#)

by 澄田 康美

PS、天子は子供である姿が一番ですね。かしこまってる姿なんて、
天子じゃないですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0601o/>

復讐の咎人

2010年10月11日11時20分発行